

近世城下町桑名における祭礼の変容

— 住民の生活文化としての祭礼へ —

渡 辺 康 代

- I. はじめに
- II. 江戸時代中期までの祭礼の変容
 - (1) 『慶長自記』にみる祭礼
 - (2) 江戸時代中期における祭礼内容の変化
- III. 江戸時代後期の祭礼にみる城下町住民の人間関係
 - (1) 石取神事および各町の祭礼の興隆
 - (2) 町人と下級武士による祭礼の共有
- IV. おわりに

I. はじめに

近世城下町における祭礼研究には、日本史学による成果が多い。とくに、黒田日出男らが、色濃い政治性とイデオロギー性をもつ近世の代表的な祭礼の一つとして東照宮祭礼を取り上げ、その研究の重要性を指摘¹⁾して以降、東照宮祭礼についての研究が進んでいる²⁾。久留島浩は「近世になって創られた城下町にこれまた新たに創られた祭礼、これこそが近世都市祭礼の典型であると考え、(中略)東照宮祭礼から、近世城下町祭礼の基本的な要素を抽出できる」³⁾として、東照宮祭礼から近世城下町祭礼の特質を導き出そうとしている。しかしながら、近世城下町の変容とともにその祭礼も不変ではあり得ない。

筆者は、下野国烏山城下町を事例として、当初は城主に披露するため城内に設定されていた祭礼の場が江戸時代中期以降に消滅し、

祭礼内容も町人主体へと変化し、城との結びつきを相対的に弱めていったことを指摘した⁴⁾。また、城下町宇都宮における祭礼が、町人町を東西に二分する奥州街道沿いの「下町」と日光街道沿いの「上町」という二つの集団で組織されていたものから、江戸時代中期以降、各町を基礎にした祭礼組織へと変わっていったことを指摘した⁵⁾。このように、城下町の祭礼は、藩主の政治的意向を受けて開始されたとしても、その後の町の変質と連動しながら、確実に変容してきた。「近世城下町祭礼」の共通項を抽出することは実際には困難で、抽出し得たとしても、近世城下町における祭礼の一時的な特徴を示すに過ぎないのである。

近年、歴史民俗学の分野において都市祭礼の歴史の変遷に注目した研究が行なわれている⁶⁾。宇野功一は、在郷町佐原における祭礼の分析から、近世初頭の豪家を中心とした複数の社会的、地域的まとまり(組)から、宝暦年間(1751~63)には、町々に行事が存在しており、この時期すでに町が明確な社会的、地域的集団として完成していたことを指摘している⁷⁾。町というまとまりが実質的な意味を持ち始める時期についての重要な指摘である。このように、都市祭礼の変容と継承過程を明らかにするなかで、都市内部での実質的な町の形成、およびその実像が見えてくると考える。

近世城下町は、武家地区・町人町・寺町のようにその構成要素の区分が明瞭な特徴をもつため、歴史地理学においては、それらを指標にした諸城下町の類型化が進められてきた⁸⁾。しかしながら、武家地区・町人町などの部分域の内部、あるいはそれを越えて取り結ばれていた諸関係については必ずしも解明されてきたわけではない。そのなかで、日本史学において、江戸の武家屋敷の邸内社の公開を取り上げ、武家屋敷と都市社会（町人町や寺院社会）の関係性を検討した岩淵令治の研究⁹⁾は卓見である。また、大岡敏昭は建築史学の立場から、絵日記の『石城日記』を用いて、江戸時代後期の忍藩（現、埼玉県行田市）における地域生活者としての中下級武士の実態、とりわけ寺や町人との結びつきを見事に描き出している¹⁰⁾。

これらの先行研究に学び、城下町という地域の全体像を明らかにするためには、部分域としての武家地区や町人町、寺町の実態を解明するのに加えて、それらの間に結ばれた諸関係についても十分に留意する必要があると考える。城下町で行なわれていた祭礼に注目することは、城下町を総体的に捉え、武家・町人・寺社等の相互関係を捉える際にも有効な手段の一つになり得ると考える。本稿では、城下町で地域生活を営む者を総じて城下町住民と記すことにする。

本稿では、Ⅱ章、桑名城下町および祭礼の事実関係については『慶長自記』、『久波奈名所図会』で確認し、Ⅲ章、祭礼と地域生活との関わりについてはおもに『桑名日記』を用いて論証する。

『慶長自記』¹¹⁾は、「桑名衆」と呼ばれた土豪の一人、太田忠右衛門吉清が慶長年間（1596～1614）の記録と家系譜とをまとめたものである。彼ら桑名衆が以前より統括してきた桑名の町に、江戸時代初頭に急激な都市計画工事が施された¹²⁾ 事実が当事者の立場で記されている。『久波奈名所図会』¹³⁾は、

長円寺の僧義道の筆と鍋屋町の工藤麟溪の画により享和2年（1802）に成立した桑名城下町を対象とした詳細な地誌である。江戸時代後期の成立であるが、江戸時代初・中期における桑名の城下町や祭礼についても綿密な考証が施された有効な史料といえる。

『桑名日記』¹⁴⁾は、下級武士（御米蔵算用係、禄高9石3人扶持）の渡部平太夫が、天保10年（1839）～嘉永元年（1848）にわたって記した私的な日記である。長男鎌之助（天保10年当時2歳）をおいて越後柏崎の陣屋に赴任している両親へ、祖父の平太夫が孫鎌之助の成長と近況を書き送ったもので、江戸時代における庶民の育児記録としての注目度が高い¹⁵⁾。しかしながら、『桑名日記』は育児だけでなく、江戸時代後期における桑名の下級武士の日常生活全般を幅広く伝えており、城下町住民の生活誌として興味深い内容を提示してくれる。この日記から当時の下級武士の生活実態、および渡部平太夫一家が取り結んでいた人間関係、下級武士が行なっていた祭礼の様相をも読み解くことができる。

本稿は、桑名を事例に、江戸時代における城下町祭礼の変容の道筋を解明し、町の実態や城下町住民の生活に迫りながら、それらと祭礼のあり方との関連性について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 江戸時代中期までの祭礼の変容

三重県桑名市の石取祭いしどりまつりは、総鎮守である三崎・春日神社（図2中a参照、以下、春日神社という通称で表記する）の祭礼である。現在、8月の第1日曜日に行なわれ、町毎に祭さい車を曳き、町内の男女とも、子どもから大人までが鉦と太鼓を打ち鳴らし、轟音を響かせる。この祭礼は、江戸時代の城下町桑名において形づくられた「石取神事」の流れを汲むもので、石取囃子の威勢と熱気が魅力となつて、近代以降北勢地方一帯でさかんに取り入れられている。参加する春日神社の氏子園

は、神社から約3km四方に広がる旧市街地区の30数ヶ町¹⁶⁾、およそ1200戸ほどである。祭車を社前で披露する際の町順は毎年籤引きで決められ、町の総代が引く籤の結果に一喜一憂する。

一方、同じく春日神社の祭礼で9月17、18日に行なわれる「御車祭」^{おくるままつり}には、戦中に焼失するまでは「北市場」「南市場」という2輦の御車が存在した¹⁷⁾(図1)。戦前までは、本町(図2中1)・三崎通(10)の四辻と、宮通(2)の木戸際でそれぞれ御車を組み立て、社前へ曳いたという。御車は焼失してからは復興されておらず、現在わずかに雅楽の奏上のみが行なわれており、これは本町の役目として継承されている。

江戸時代における桑名の春日神社では、今日にも引き継がれている上記の2つの祭礼に、比与利祭^{ひよりまつり}を加えた、合計3種類の祭礼が行なわれていた。

本章では、江戸時代における桑名の3つの祭礼、「御車祭」「比与利祭」「石取神事」が、いつからどのように開始され、それぞれいかなる内容的特徴を持つ祭礼であったのかを、桑名の町の変化と関連づけながら明らかにしたい。

(1) 『慶長自記』にみる祭礼

桑名は、木曾川・揖斐川・長良川の三大河の河港として、江戸時代初頭に城下町として町割りされる以前から、「桑名衆」と呼ばれた土豪・豪商ら¹⁸⁾を中心に伊勢湾屈指の繁栄を誇った自治都市とされる。彼らは舟運や酒造業等を営み、富を貯えていたとみられる。『慶長自記』には頻繁に米の相場が記されていることから、桑名衆の一人、太田氏も廻米をはじめとした舟運を営んでいたことが推測される。

『慶長自記』の慶長9年(1604)の条には、

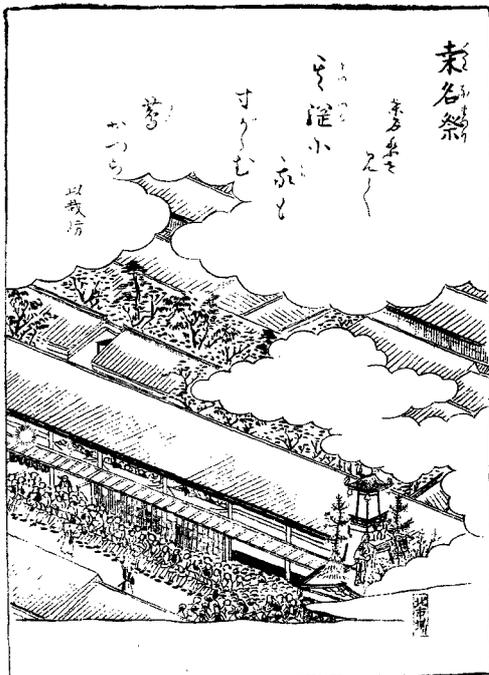
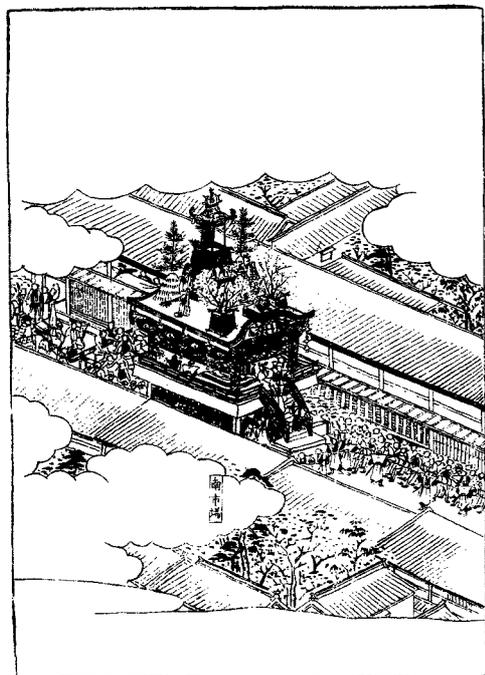


図1 御車祭の楼車
(『久波奈名所図会』中巻, 46・47頁より転載)

御車の造作、去年雖有之、一兩分^(輛)の輪挟不出来、輪も薄くして悪き故、重て式兩分の輪、其外大材木熊野へ御あつらへ被成、当年八月三日に来る。(中略)式兩の車出来有之。くし取して北市場南市場へ御取可有と申人も候へ共、北は北市場取、南は南市場へ取也¹⁹⁾

とある。御車は当年に城主本多忠勝により修繕された。これを籤取りで引き渡す案も出たが、北車は変わらず北市場が、南車は南市場が引き取った、とあることから、当時の桑名には実際に北市場・南市場という市場が存在していたことが分かる。そして、それらが御車を保持してきた地域集団でもあったこと、この2輛は既に江戸時代初頭以前から存在していたことが判明する。また、御車の車輪の材木を熊野から運ぶなど、相当地に重厚な車輪を持つ大型の車であったと推測できる。

『久波奈名所図会』に所収された座方市神社^{さかた}の社伝には、

当所三崎春日の両社大祭礼、毎年八月十八日なり。此日より九月廿日まで、南北市場にて町在打混して売買交易の市を立る事を旧例とす。市の終の日、当社の祭日なりと、寛文年中まで其事あり、其後市を立る事無し²⁰⁾

とあり、御車祭の祭日である旧暦8月18日から座方市神社(図2中b参照)の祭日である旧暦9月20日までの約1ヶ月間、南北市場において市が立っていたことが判明する。御車祭は桑名の総鎮守の大祭であるとともに、市の開催を告げる役割を持った祭礼でもあったことが分かる。この市は寛文年中(1661~72)まで続いた。

次に、御車を保持する地区で、旧来よりの桑名の中心地と目される南北市場の位置についてであるが、『慶長自記』慶長19年(1614)条は、当時の南北市場について重要な示唆を与えてくれる。

八月の御神事の時、本町衆町へ立候衆と

丑の年(=慶長18年(1613)、筆者註)の御神事の時より致内談、宮通へ立候衆の本町に店を打たてられ候て、宮通にては一間を十匁つつの店賃にて候、本町にては一間を二匁つつにてかし候²¹⁾

慶長18年(1613)の御車祭の際に、本町衆は「町へ立候衆」、すなわち市に立つ商人たちと内談し、結果、宮通に出店していた商人らが本町において店を立てたことがうかがえる。なぜならば、宮通では間口1間につき10匁の店賃に対し、本町では2匁と安く貸したためであった。この記述から、江戸時代初頭には本町と宮通の路上において各々の町衆が間口を貸すかたちで市立てがなされており、方角からも本町が北市場、宮通が南市場に相当すると考えられる。そして、春日神社の門前域が江戸時代以前からの桑名における市場であり、繁華な中心地であったことがうかがえる(図2参照)。

また、市に立つ商人の誘致をめぐり、本町衆(北市場)と宮通衆(南市場)が互いに競い合いながら、市の活気を増長させていたことが前掲の史料から読み取れる。太田氏をはじめ、桑名衆には広い屋敷地を春日神社門前域に持つものが多く²²⁾、彼らは北市場・南市場の運営にも関わっていたと考えられる。御車祭は桑名衆の参列なしには始まらないとされた²³⁾。北市場・南市場という2輛の樓車は桑名衆の財力に裏打ちされたものであり、御車祭は、彼らが支えた祭礼であったといつてよい。御車祭は、近世城下町となる以前からの市場町や港町としての桑名の繁栄、また、舟運等によって富を成した桑名衆の存在を明示する祭礼でもあった。

寛文年間(1661~72)以降の市の廃止後も御車祭は継続されたが、『慶長自記』からは、江戸時代初頭にはこれとは別の祭礼も開始されていたことが注目される。当時の桑名において華々しく行なわれていた比与利祭と「石取」であった。

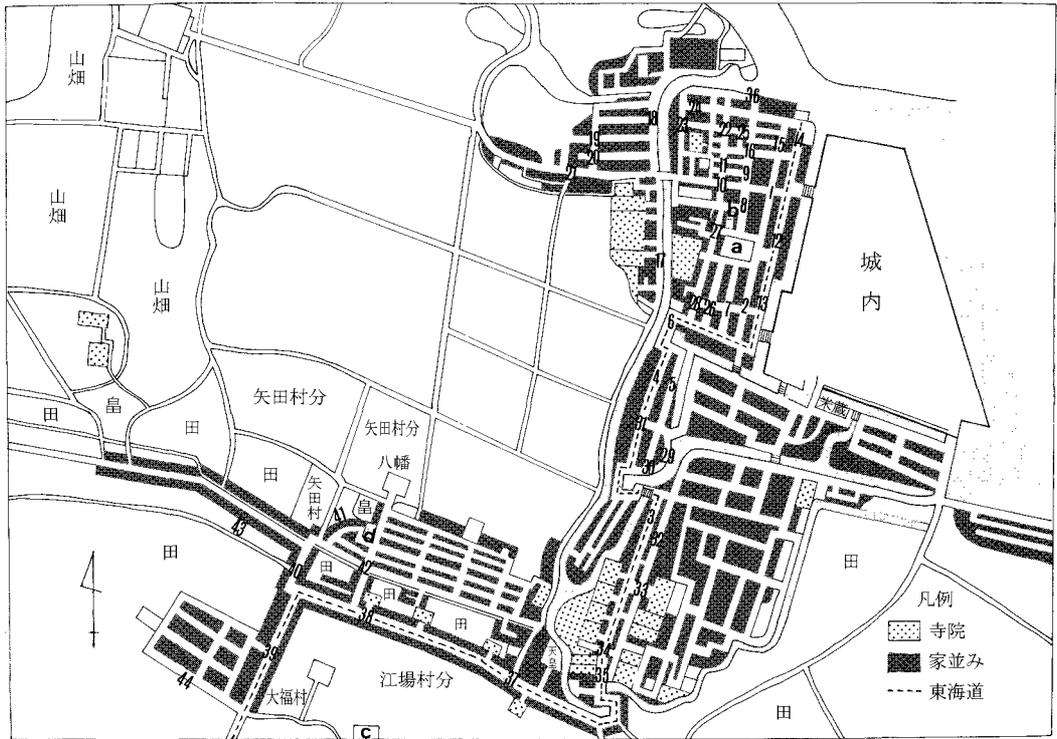


図2 江戸時代における桑名城下の各町

(貞享3年(1686)以前「御城下惣図」(『久波奈名所図会』中巻, 76・77頁)より作成)

a 春日神社 b 座方市神社 c 牛頭天王社 d 西龍寺

- 1 本町 2 宮通 3 新町 4 吉津屋町 5 紺屋町 6 京町 7 職人町 8 北魚町
 9 風呂町 10 三崎通 11 宝殿町 12 江戸町 13 片町 14 川口 15 大工町 16 宮町 17 寺町
 18 北町 19 中町 20 片町 21 堤原 22 小網町 23 浄土寺屋敷 24 新舟町 25 船町 26 油町
 27 田町 28 南魚町 29 葭町 30 入江町 31 鍛冶町 32 萱町 33 新萱町 34 伝馬町
 35 伝馬末町 36 船馬町 37 鍋屋町 38 矢田町 39 福江町 40 水車 41 庚申堂 42 八幡瀬古
 43 馬道 44 新地

『慶長自記』の慶長18年(1613)条に
 七月十四日、十五日、町々に踊りあり、
 御城へ入次第

として、新町(図2中3)・吉津屋町(4)・紺屋町(5)・京町(6)・宮通(2)・職人町(7)・本町(1)・北魚町(8)・風呂町(9)・三崎通(10)・宝殿町(11)・江戸町(12)・片町(13)の名がみえる(表1)。これらは江戸時代初頭において祭礼に参加するに足る家並みが整っていた町々であったといえよう。それらは、新町を除いてはみな春日神社に程近い町々で

あり、近世桑名の町人町の充実は、旧来からの中心地であった春日神社付近から進んでいったことがうかがえる。神社から南方に離れて存在する「新町」という町名も、この一帯が城下町建設に伴って新たに開かれた場所であることを物語っている。また、春日神社以南と以北の町々とで祭日を分けており、従来よりの南北市場と同様に、春日神社を基点として、これを取り囲むように町人町が発展してきた形を見ることができる。

続いて表1をみると、慶長18年の7月17日

表1 江戸時代における桑名の祭礼内容の変化

年 代	事 項
慶長6年(1601) 慶長9年(1604) 慶長18年(1613)	本多忠勝入城、桑名城を修築。桑名の町割を断行。 2輛の御車(北市場・南市場)できる。木材は熊野より運ぶ。 7月14・15日、町々で踊りが行なわれる。御城内入りした順序は、14日 1番 新町 2番 吉津屋町・紺屋町一組 3番 京町・宮通一組 15日 1番 職人町 2番 本町・北魚町・風呂町・三崎通・宝殿町一組 3番 江戸町・片町一組 7月17日、石取あり。江戸町の口、川口に唐船1艘、南に1艘、片町にうかい舟1艘。7月21日、御城にて御能あり。又三郎(太田忠右衛門の息子か)初めて出る。演目は夕顔。
元和5年(1619) 寛文3年(1663)	町年寄(=桑名衆)34人、御車祭の神面2つを奉納。 宮通より御車祭に供奉の武者長刀14振、鉾1筋寄進。この頃から町年寄衆を大名に作る風流が出されるようになる。
貞享元年(1684) 元禄5年(1692) 元禄12年(1699) 正徳3年(1713)	[桑名家757軒、9648人。桑名町中1864軒、12520人] 本町上組より御車祭供奉武者の太刀15振が寄進された。 [桑名町惣家数2152軒] この頃より比与利祭には、城惣堀内の内町の氏子町々より屋形車、或は児童の花売出立、魚売出立、小袖売出立、唐人出立、大名出立など種々に華美を尽くした屋台が出される。
享保15年(1730) 宝暦4年(1754) 宝暦5年(1755)	[惣本家2063軒、859軒(借屋但し裏表地子借仕切借屋)惣ヅ2988軒、此籠2964] 7月7日、石取神事の車数36台。 石取神事を比与利祭より分けて7月6・7日に行なうこととする。比与利祭は7月16・17日とし、これは専ら練物となる。
享和2年(1802) 文政6年(1823) 文政11年(1828)	祭車45台、練物20ヶ町出る。 [城下町中家数2519軒、城下町中人数8527人、寺56ヶ寺] 東鍋屋町・西鍋屋町・東矢田町・西矢田町・北福江町・南福江町の6ヶ町が新たに石取神事に加わる。
天保10年(1839)	比与利祭、道囃子は京町・萱町・片町。踊りは油町、三味線弾き3人、踊り子1人。浦島の踊り面をくわえて踊る。職人町は居合抜。練り子はいつも通りで、大きなトンボ、蛙、蟬、螻蛄をかぶり歩く。萱町の練り子は大きな山伏姿で皆法螺貝を吹きながら歩く。先達おとなが天狗面をかぶり、大きな法螺貝を負い、ぶっさき羽織に大小を差し、大きな竹の子笠をかぶり、火の元まわりの棒をつけて歩く様子が面白い。
天保11年(1840)	8月18日、本町の山(=御車)を曳く時、喧嘩あり。 石取神事、暮合より鏡之助を連れて紺屋町通りへ出て、先の方10ばかりは見なかったが、残りの40余を見せる。三崎通は太神樂のかぶる獅子の作り物。 比与利祭、宮通の練り子が蛙と螻蛄、トンボ、蝸牛、蟬の張り子をかぶって歩く。三崎通がお染久松、風呂町が潮波みの練物。片町が粋な踊りで上手。油町は道囃子。職人町は神樂囃子。
天保12年(1841) 天保13年(1842)	穩便(=鳴物停止)のため石取神事がなく、さびしい夏である。 7月7日、当年は水車の祭車が新しくでき、彫物をよく見せたがり、ぼんぼりを20余付けている。若い衆に留守居を頼み、妻は水車まで行って見てきたようだ。鏡之助と近所の子供達を連れて矢田町へ石取神事を見に行く。町方、儉約令のため、着用のものは皆木綿布類ばかりで質素である。 比与利祭、嚴重な儉約令のため、傘鉾・衣類等立派なものなし。傘鉾は大方唐木綿に墨絵を描いたもので、そのほかも麻布類。先年用いた唐木綿を取り出してきたと見える町もある。
天保14年(1843)	8月、本町・宮通両方の御車を見て、春日へ参詣。 石取神事、鏡之助大いに楽しむ。当年は取り締まりが甚だ厳しく、彫刻の施された祭車は出せず、鉦も8寸(=約24cm)のものに限られた。四ツ半過(=午前11時頃)より叩きはじまる。鏡之助はおばば(=平太夫の妻)と見に行った。 比与利祭、福助踊、江戸町の踊りなどは手間取っていたので見ずに、油町の伊勢音頭の踊り一つを見せて帰る。
弘化元年(1844)	御車祭、赤飯を蒸す。大提灯が灯るまで待って参詣、御車を見る。 比与利祭、道囃子3つ、踊りは吉津屋町のみ。油町で大分魚類の出し物ができ、かぶり歩く。
弘化3年(1846)	比与利祭、油町・京町・職人町・南魚町いずれも道囃子。傘鉾は立派なものは不許可のため、ざっとした墨絵などで、その数も減り、見る程のものがない。

(慶長18年(1613)まで『慶長自記』、元和5年(1619)～文政11年(1828)は『久波奈名所図会』中巻、および三崎民樹編『桑名神社・中臣神社縁起鈔』(明治24年(1891))、天保10年(1839)からは『桑名日記』より作成)

に「石取」の行事がみえ、先の14・15日に城内入りして行なわれた町々の踊りは、比与利祭の最初の様相であったと考えられる。この時披露された踊りは、それが行なわれた季節から推測して、盆踊りの意味をもつものと想像される。「石取」も日を置かずに行なわれており、当初の比与利祭や「石取」は、一連の盆行事として開始された可能性がある。この踊りが、一方で、城内という披露の場を有していたことは特徴的である。また、当時の「石取」の様相については、同年条に、

七月十七日石取あり。江戸町の口、河口に唐船一艘、南に一艘、片町にうかい舟一艘

とある(表1)。当時の「石取」では、御城内と川口(図2中14)、江戸町(12)などの町人町との境にあたる内堀に豪華な唐船などを浮かべ、城主および武家衆への披露に供していたことが想定される。当時の「石取」は、今日のそれとは全く趣を異にした形態がとられていた。同年の7月21日には、城にて能の披露も行なわれた(表1)。江戸時代初頭の比与利祭や「石取」は、城内へ向けての踊りや唐船の披露など、城主の存在を強く意識し、政治的な意味合いの強い祭礼形態がとられていたといえる。

(2) 江戸時代中期における祭礼内容の変化

江戸時代中期の比与利祭では「花売」「魚売」「小袖売」「唐人」など、稚児練物や人形の飾り物を車に乗せた練物が見られた(表1、正徳3年(1713)条)。これらの練物は、東照宮祭礼などの官祭に倣い諸国の城下町において取り入れられたものと同様で、桑名の場合、おそらく名古屋の東照宮祭礼の影響を受けたと目される²⁴⁾。このことから、桑名でも当時流行の模範的な内容に則した祭礼が行なわれていたといえよう。さらに注目したいのは、これらの練物で比与利祭に参加していたのが、城惣堀内の町人地「内町」の氏子

町々であったことである。桑名城下の町人町においては、桑名城惣堀内の内町と、近隣農村(「在」)から派生してきた外町という二区分が存在し(図3)、比与利祭への参加はそのうちの内町に限られていた。城内入りがなされた比与利祭には、桑名における町人町の形成過程を反映し、従来よりの町人町である内町限定の参加形態がとられていた。

一方、「石取」の行事は、その名の通り、氏子が町屋川で栗石を拾い、それを春日神社に献納したことにはじまるとされる。「石取」が行なわれるようになった理由には諸説あるが、その一つに、石を成長する生き物と考え、そこに永遠性を認め、祈願を託し奉納したとする、石信仰に基づく行事としての解釈がある²⁵⁾。この「石取」の際に太鼓や鉦で囃す形態が現れたのは、いつごろからであったのだろうか。

正徳年中(1711~15)には20ヶ町が高砂、猩々²⁶⁾、鹿に紅葉など様々なものを飾った車、または地車に大傘をさした傘鉦が出される²⁷⁾など、当時の「石取」は比与利祭の一部として行なわれており、比与利祭と似て綺羅を尽くした出し物となっていた。この祭礼内容も東照宮祭礼に範をとり、諸城下町において取り入れられたものと同様であったと推測される²⁸⁾。

しかしながら、江戸時代中期の享保年中(1716~35)に「鉦太鼓を寺院より借、笛などをもまじえ、思々の囃子」を伴った小さな車が現れていたようである²⁹⁾。寺から鉦や太鼓を借りて囃した素朴なものであり、この頃を石取車・石取囃子の萌芽期として位置づけられよう。桑名を含む北勢地方は屈指の真宗地帯であるため、祭礼にもその宗教色を見いだしがちであるが、それ以上に、江戸時代において寺院が町人の生活や祭礼と密接な関わりをもちながら存在していた事実を重視したい。

大福村、江場村をはじめ城下町桑名に近接

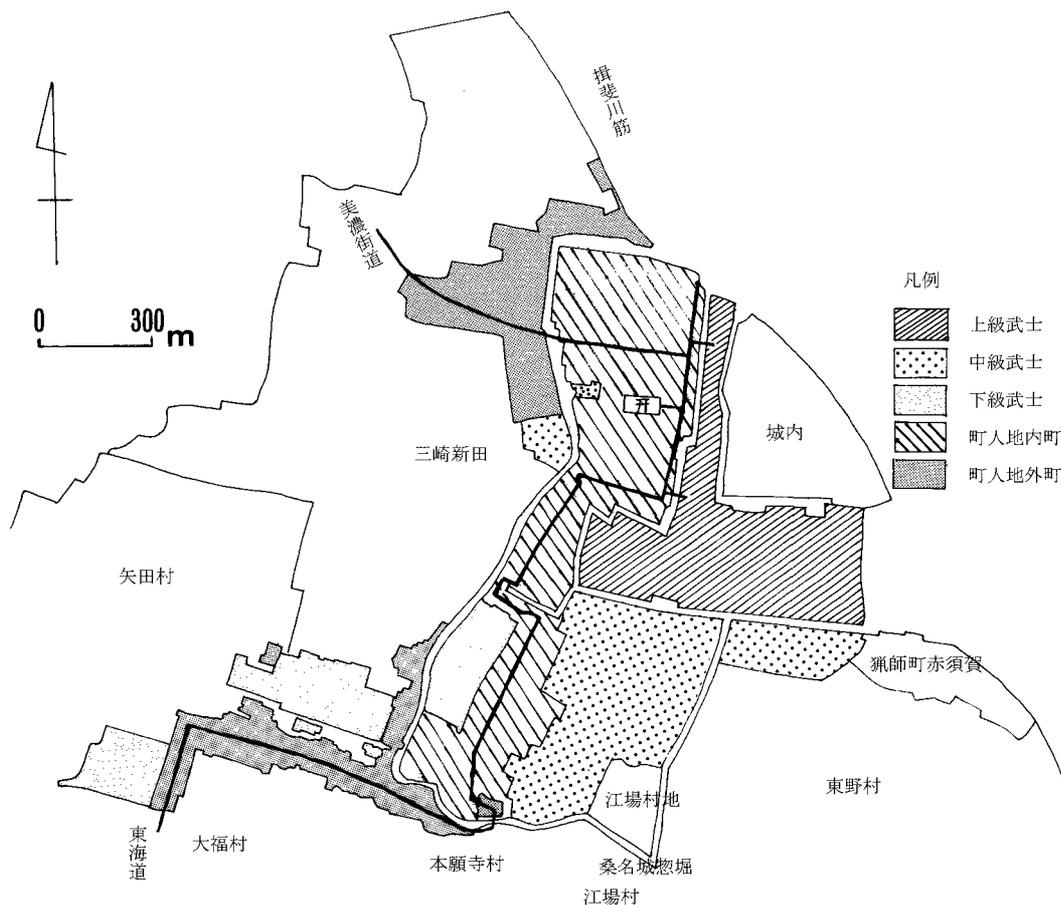


図3 城下町桑名における武家地区と町人町
 (慶長6年(1601)頃「桑名御城下町割り概念図」
 (桑名市教育委員会編『春日神社の石取祭』, 1998, 10頁)より作成)

する農村部(図2参照)では、江戸時代には夏の行事として虫送りが行なわれていた。この際に打ち鳴らされていたのが、町場における囃子と同様、鉦と太鼓であった。大福村・福江町の氏神³⁰、牛頭天王社(図2中c)の「大門祭」は、旧暦6月14日に数十本の松明を灯し、鉦と太鼓を囃し立て海浜へ行列するもので、城下町近辺の子ども達の見物の的となっていた³¹。このように、鉦や太鼓を囃す風流は、城下町桑名に限らず、むしろ農村部も含めてこの地域一帯に広く共通したやり方であったといえる。既存の風流が石取行事に

取り入れられ、石取囃子が形成されたと考えられる。以後、石取祭車と囃子は、着実に桑名の町中で育まれていった。

それまで比与利祭と同時に行なわれていた「石取」が独立し、「石取神事」は旧暦7月6・7日に、比与利祭は旧暦7月16・17日に、分離して行なわれるようになったのが宝暦5年(1755)以降である。分けて行なわなければならないほどに、石取神事は比与利祭とは趣向を異にする祭礼になっていった。鉦や太鼓を囃したり、提灯や大型の創作飾り物を乗せた祭車などは石取神事において、練物

行列や舞台での芝居などは比与利祭において出される³²⁾ といった、祭礼内容の差異が明確であった(図4・5参照)。その内容的特徴とも関係すると思われるが、石取神事は城内入りがなされず、その参加町も内町に限らず外町にもおよんでいたことが、石取神事と比与利祭との大きな相違点である。城内入りし、内町のみでの参加で行なわれる、いわば城主への披露が意識された祭礼が比与利祭であり、それに対し、桑名の全町人町で行なわれる、城内入りのない、太鼓や鉦による囃子が鳴り響く喧噪の祭礼が石取神事、というように性格が分かれていった。こうして江戸時代中期に、今日の石取祭の原型ともいべき石取神事が生まれた。町人自らが行ない楽しんだところに、石取神事の最たる特色がある。対比して、比与利祭は幕藩制の終焉とともに消滅していったのであるが、このことは、城

との結びつきをもって成り立っていた比与利祭の性格を如実に示している。石取神事の誕生は、城との結びつきを相対的に弱めながら町人独自の文化や地域色を強めていった、江戸時代中期以降の城下町桑名の質的な変容を示している可能性がある。

Ⅲ. 江戸時代後期の祭礼にみる城下町住民の人間関係

本章では、おもに『桑名日記』を用いて、江戸時代後期における下級武士と町人の地域生活や祭礼、彼らを取り結んでいた人間関係を具体的に明らかにしたい。

石取神事は江戸時代中期以降に発展してきた、太鼓や鉦を打ち鳴らす等の比較的素朴な内容の祭礼であった。このような祭礼内容が形づくられ、受け継がれてきた背景には、いかなる城下町人の人間関係があったのだろうか

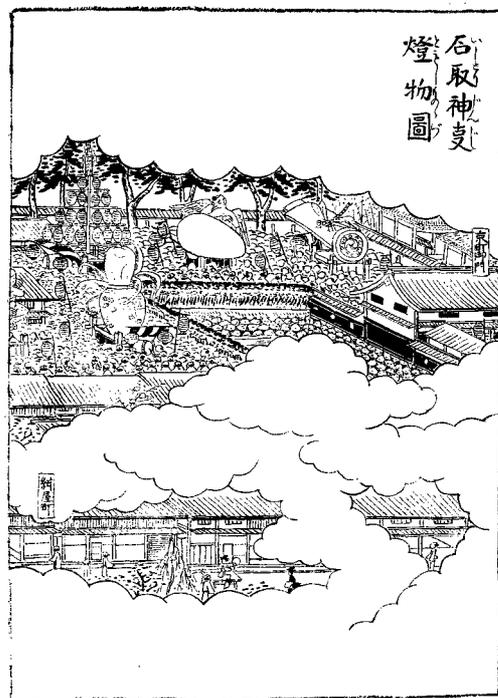


図4 石取神事における大型の飾り物と提灯、太鼓と鉦の囃子
(『久波奈名所図会』中巻, 64・65頁より転載)



図5 城内入りした比与利祭の練物行列と芝居舞台
 (『久波奈名所図会』中巻, 40・41頁より転載)

か。また、石取神事は城内入りのない、全町人町を挙げての祭礼であったが、一方で城下の武家は、これに対しどのようなまなざしを向けていたのであろうか。

(1) 石取神事および各町の祭礼の興隆

江戸時代後期になると、石取神事への参加町、および祭車の数の増加が顕著になる。表1をみると、享和2年(1802)の祭車の数は54台にもおよび、文政11年(1828)からは、外町の鍋屋町(図2中37)・矢田町(38)・福江町(39)も参加していた³³⁾。天保13年(1842)には水車(図2中40)の祭車も出されていたことが分かる。表1の天保13年(1842)条や弘化3年(1846)条をみると、比与利祭は、儉約令などの取り締まりの対象となり、江戸時代後期には、新趣向の乏しさや練物の数の減少など、むしろ縮小傾向にあったことがうかがい

知れる³⁴⁾。このように法令に則して縮小化されていったことにも、比与利祭の公的な性格をみることができよう。それとは対照的に、太鼓と鉦の囃子という祭礼内容をとることで、儉約令などの網の目をかいくぐりつつ、石取神事の活気や賑わいは増大していった。囃子という比較的素朴な祭礼内容を選択し、定着させたことは、法令による取り締まりを免れるためにも有効であったと考えられる。

『桑名日記』を記した渡部平太夫は、城下町の南西端に位置する矢田河原(字庚申堂、図2中41)に住しており、この一帯に下級武士の長屋が連なっていた(図3参照)。矢田河原は、外町に当たる八幡瀬古(図2中42)や水車(40)、馬道(43)、福江町(39)や矢田町(38)、または農村の矢田村などに近接する地区であった。天保14年(1843)には「七月五日より石取祭。鏝之助大たのしみ也」(表1)な

どと見え、下級武士一家も心待ちにしていた様子うかがえる。実際、石取囃子を聞くだけでは飽きたらず、孫の鑠之助ら下級武士の子ども達が太鼓を打ち鳴らし遊ぶ様子や、若者が近隣町の町人らに組して石取神事に参加し太鼓を叩き、後に咎めを受けた事なども記されている³⁵⁾。

石取神事の際に、囃子や祭車、紙細工の飾り物などを創り出す基本単位は町であったが、一方で、近隣の数ヶ町がひとまとまりとなって構成された組合もあった。江戸時代には各組合の代表者が引いた籤の順に、これを単位に渡祭を行なう方法がとられていた³⁶⁾。享和2年(1802)当時は、①北魚町(図2中8)・大工町(15)・宮町(16)・風呂町(9)、②寺町(17)・北町(18)・中町(19)・片町(20)・堤原(21)、③小網町(22)・浄土寺屋敷(23)・新舟町(24)・宝殿町(11)、④船町(25)、⑤本町(1)、⑥三崎通(10)、⑦江戸町(12)・南片町・北片町(13)、⑧油町(26)・田町(27)・南魚町(28)、⑨宮通(2)・京町(6)、⑩紺屋町(5)・葭町(29)・入江町(30)・吉津屋町(4)・鍛冶町(31)、⑪萱町(32)・新萱町(33)・新町(3)・伝馬町(34)・伝馬末町(35)、⑫職人町(7)、⑬船馬町(36)・川口(14)、の13組が成り立っていた³⁷⁾。組合は基本的に内町にのみ組織されていたことが分かる。しかしながら、組合という組織を持たなかった外町の各町も参加できたように、江戸時代後期の石取神事には、町単位での参加や、町毎に出された祭車数の増加がみられ、町の結束力が相対的に高まってきたことがうかがえる。

また、『桑名日記』からは、石取神事の他にも当時町を単位に数々の祭礼が行なわれていたことが判明する。弘化4年(1847)9月19日条には、

今夜は(矢田)八幡参仰山有之、押分けられぬ程のよし。有り合せの品物にて、種々の作り物有之見物に廻る。ずいぶん見物多く有之。以前は三尺坊祭礼の節、

鍋屋町十か十五は有之候得共、外祭礼には無之候処、今来大流行。(中略)先日京町ビシャモン祭礼の節も大分作り物有之候。

とあり、矢田町の矢田八幡祭礼、鍋屋町の三尺坊祭礼、および京町の毘沙門天の祭礼などの記述が見える。これらの各町の祭礼には有り合わせの品物で作った「作り物」が出されていた。弘化4年(1847)9月28日条に、

鍋屋町作り物は、四斗樽廿四五を寄せ、松の木の枝へ引揚、蜂の巣にして、砂糖樽にて蜂を作り置候よし。

とあるように、その祭礼内容は町の生業に則し、創意工夫に富んでいた。囃子や飾り物といった、石取神事における創作的な祭礼内容との共通性が多い。

また、石取神事だけでなく、このような町を基盤にした小規模な諸祭礼にも幾度も見物に出かけ、日記に記していることから、渡部平太夫ら下級武家が、町人らの祭礼文化を親しみをもって受け止めていたことがうかがえよう。

江戸時代後期の城下町桑名では、町が実質的なまとまりとなり、これを基に石取神事や町毎の祭礼行事が興隆していった。石取神事の際に表れた町の結束力について、『久波奈名所図会』を画いた鍋屋町の絵師、工藤麟溪は、

此神事をや家格身柄の勝劣をわかたず、富るも貧しきも、うち混じ礼を改るにもあらで、唯自町の剛勇を輝かさん事のみを主とせり³⁸⁾

と述べている。家格身柄の優劣を問わず、町を構成する人々すべてが自町の意気を示すことに一丸となった祭礼が石取神事であり、後に祭車が豪華になっていっても、この参加形態は変わらなかった。太鼓や鉦を囃すという内容の素朴さにも表されているように、石取神事への参加機会には平等性が貫かれていた。家格身柄をこえた平等性が町内の人々に

約束された祭礼であったからこそ、「神事」という名が冠せられ、そしてこのことが石取祭が今日にも受け継がれている最大の理由ではないだろうか。

(2) 町人と下級武士による祭礼文化の共有

『桑名日記』の史料性格上、ここでは下級武士について扱うこととする。江戸時代後期の下級藩士、渡部平太夫らは石取神事をはじめ町人の大小さまざまな祭礼に親しんでいたが、実際に下級武士と町人との間にはどのような関係があったのだろうか。最後に下級武士の生活実態を日記から読み解き、日常的な町人との交流の様相を明らかにしたい。

平太夫家では、糸引き、網すき、^お芋み、煙草刻³⁹⁾などの内職が行なわれており、これらは桑名下級武家の老若男女を問わず日常的に行なわれていた。桑名は富田などの漁業地に近接しており、鯛網などの需要があったため、網すきや芋みもさかんであった。木綿の糸引きも家計を補助するよい稼ぎになっていた(表2、天保10年10月21日条参照)。江戸時代中後期の桑名周辺では綿作がさかんであり⁴⁰⁾、それに伴う綿糸・綿織物などの商品生産が行なわれていた。下級武士一家も糸引きの内職を行なうなど、木綿生産の一端を担っており、城下町においてそうした内職に携わる人々が数多く存在していたことが想定される。漁網や木綿生産は村人や町人だけでなく、下級藩士らを含めた城下町住民の内職として広く行なわれていた可能性を指摘できる。

『桑名日記』に描写されている下級武士の内職情景に注目したい。表2の天保14年(1843)2月7日条や弘化元年(1844)9月25日条をみると、「問屋の娘」「明王院の娘」など、近隣の町人や寺の娘とも一緒に、仕事を持ち寄っては楽しそうに手を動かしている様子が伝わってくる。日記からは「若い者宿」「網会」「糸引き宿」と表現された若者、娘

達、年寄り等、内職仲間が集う場所が、いくつも設定されていたことが分かる。糸引きや網すきの宿になった家では、仲間に茶や菓子等をふるまったのであろう。弘化元年(1844)9月25日条には仕事後のささやかな楽しみも記されている(表2)。近所の知己が集っての内職には、歓談、本読みなどの楽しみが差し挟まれており、そうしたことが単調な内職仕事に潤いを与えていた。平太夫家には、当時娘(おなか)がおり、近隣の町人も含めた娘達と毎日のように行き来していた。娘の糸引き宿になった家には、たいてい若者達も仕事を持ち寄って、家中が賑やかになった。平太夫家の、主に一階の茶の間や二階が内職仕事場になっていたが、それは一種の社交場でもあったといえよう。若者に倣い、子ども達の網すきが行なわれることもあった。

下級武士の内職は、とかく生活苦の中で黙々と行なわれていたように想定されがちだが、『桑名日記』には、近所の若者や娘達、年寄り仲間などが集って様々な楽しみを伴いながら行なっていた事実が記されている。そして、渡部平太夫一家が親しくつきあっていた「近所」の範囲は、矢田河原や新地(図2中44)などの下級武家地区にとどまらず、内職仕事やその受け納めも関連して、水車(40)や馬道(43)など近隣の町人町にわたっていた。また、天保11年11月3日条には、鎌之助が近隣の村人や町人らに慈しまれながら成長していった様子が見事に表現されている(表2)。下級武士一家が取り結んでいた人間関係が、町人や村人にもおよんでいたことは注目に値する。

上述してきたような内職などを通じた近隣の町人および村人との日常的な人間関係は、下級武家地区における祭礼の内容にも大いに反映されていた。宇庚申堂の鎮守は西龍寺(図2中d)境内の金毘羅社であったが、この祭礼は下級武士の若者らが太鼓を叩いたり、飾り物や花火を作成するなど、石取神事や町

表2 下級武士一家における内職および祭礼情景

[平太夫家の日常生活および内職風景]

天保10年(1839)10月21日

「今年は綿がよくでき糸の引賃がよくなり、おなか(=平太夫の娘)の糸もこの間二十匁水車(の糸屋)へ行つたれば三百十文の割にてよこす。おととひ又二十めやつたれば三百七十文の割にてよこす。網すきは少くなり男も大分糸をひくよふになる。けふいとを引たところが、鎌こじやましてどもならんで、ひるから佐藤へおばばがつれていつたあとでよふやくみつしりひいた。」

天保11年(1840)6月15日

「天む天のうさまへ鎌之助をつれて参り二ゆき、くわしとすもをかふてやる。まつしろなすめくわがうつてあるをみてほしいといふから、まだうまくなへからおきにしろといふてもほしひといふから一きれたべさせたれバうまくなへゆへ一きれでたんのふする。手ばたんをかふてかへる。月八さへる。大寺のおみちさ、ゑんがわで芋をうんでいる。おばば、ひとへものしたてている。おなかとおこうさ、いとひき。鎌こ、えんがわで、手ばたんをとぼしてうれしがる。このあいだまでもつていてもぶすぶすといふとはなしてならぬゆへ二のうでをおさまへておらねばならなんだが、もはやひとりでとぼすやふになる。」

天保11年11月3日

「しんやだの市兵が鎌之助をたへて(曲芸を)みせてくれる。それから又どこのものかしらぬすしうりが、鎌こをたへて見せてくれ、仕舞二すしを一つくれたげな。」

天保14年(1843)2月7日

「稲倉娘、野本の娘、おなか糸ひき。明王院の娘其向ひ問屋の娘、芋うミ。五人二てしゃべるやら笑ふやら賑やか也。」

天保14年3月16日

「けふ八横村糸ひき宿二而、おなか、起ると直二引二行。朝飯も昼飯も食て箸ヲ置直二行じや。けふ八皆横村へ集り、内へ来る者なく鎌さびしがる。」

弘化元年(1844)9月25日

「内でも夜なべ仕廻ふてからおさつ鍋二一盃ゆでる。若者五六人来てゐる。(馬道の)御代田の娘も網すきに來てゐる。(明王院)おりいは毎晩泊まる。」

弘化2年(1845)11月18日

「裏の畑の菜取り。(中略)手伝、御代田・中田・明王院の娘。隣のお袋も拵ふて下さる。娘ともの手首皆はれて指太く成。夫でも皆飲て手伝ニ來ルなり。」

弘化2年12月3日

「加藤九兵衛太閤記を持てくる。横村のかミさん八芋を以て夜なへ二御さる。娘共ハ茶の間二て糸引。おかミさんハ部屋にて本聞きながら芋うミ。おはハ八大根刻なり。」

弘化3年(1846)4月26日

「両三年富田不漁の処、この節大分鯛取れ、日々早朝より晩方まで富田獵師町より売に参る。鯛売呼び声まで勢付、網も追々直段宜相成、三ノ位より三ノ四百位までに売れ候よし。すき賃も段々引揚、御家中も一統歡び候様に相成。」

弘化3年5月22日

「鎌之助一昨日頃より子供同志網すきはじめ、稲倉へ昼より持て行く。昨日は内の二階に集りすく。今日は御代田へ持て行く。網など決してすくには及ばぬから、手習と書物に精出して習はにやならぬと云ば、皆子供がする故、おれもすきたくてならぬ、煙硝買ふのにするから、すかせてくんへと云故、致し方なし。」

[祭礼]

天保12年(1841)6月10日

「けふも若手やいが、外からはゐると思へハ裏から出、裏からはゐるかと思へハ外へ出る。昼よりよる迄(西龍寺境内の)金毘羅二て太鼓たたき通し。あまり太鼓をたたひて手二まめが出来たげな。」

弘化元年(1844)10月11日

「夜前八金毘羅祭礼二付、若手裏の庵を借飲。けふ八庵二而網すき。碁も始つてゐる様子。茶の間の障子と向かい合わせ故、能見ゆる。夕方皆々仕廻ふて歸る。庵の前広く日当たりハよし。」

弘化4年(1847)6月9日

「今明金毘羅祭礼にて若者集り二階で飾りものを作るとて、朝より取懸り居候由。何が出来ると思へば、三つ田より面を買ふてきて播州皿屋敷の積り、西龍寺の古井の中より出て、幽霊を作り、その脇に徳利になひ、その幽霊を見て徳利を荷ひながら仰天いたし尻もちつき候処を飾る。中々能出来る。灯笼うちんも大分有之、参詣賑々敷田んぼにて花火揚、東の方にて流星花火。」

(『桑名日記』より作成)

人町における諸祭礼と同内容であった。花火作りに必要な煙硝を購入するために子ども達の網すきが行なわれていたように(表2, 弘化3年(1846)5月22日条参照), 若者たちが内職に精を出した理由は、祭礼の楽しみのためでもあったことは十分に考えられる。

表2の弘化4年(1847)6月9日条にみえるように、祭礼の飾り物は、播州皿屋敷の幽霊など、若者達の創意工夫に富んだ手作りのおもしろいものであった。これらは、石取神事における飾り物や各町の祭礼における作り物との共通性が顕著である。そして、それらを平太夫家の二階に集まり、普段の内職仲間で作成しており、内職の仕事場は、祭礼の飾り物や花火の製作の場にもなっていた。また、金毘羅社の祭日には若者や子どもは一日中太鼓を打ち鳴らし興じており、下級武家地区においても町人の石取囃子が積極的に取り入れられていた。

このように江戸時代後期の城下町桑名の町人と下級武士は、祭礼文化を共有していた。下級武士らにとって、町人および彼らの行事は地理的にも情情的にも近く、身分や職分からくる人間関係の制約が緩やかであった事実が見える。前項で述べた、下級武士の若者が近隣町の町人らと共に石取神事に参加して太鼓を叩くという行動は、下級武家とその近隣の町人町との日常生活から生じた共同体的な意識の表れとみることができよう。

また、金毘羅祭礼の際に若者が「庵(西龍寺)」に集まっているように(表2, 弘化元年(1844)10月11日条参照), 地域内の寺社は人々が集う場と機会を提供しており、城下町の人々の生活と深く関わりながら存在していた。地域内の寺社の行事を通して、町住民の結びつきが高められ、町毎の祭礼の形成にまで発展してきた可能性がある。さらに、囃子の練習などを通して、町内の人間関係が築き上げられるといった、町の結束を強める装置としての祭礼の役割も指摘できる。

江戸時代後期の城下町桑名における諸祭礼は、素朴だが創意工夫に富み、地域生活に則した内容になっていたことを指摘できる。その祭礼文化は町人にとどまるものではなく、下級武家によっても共有され、支えられていた。

IV. おわりに

城下町桑名の祭礼を長期的な視野で眺めると、時代を下るごとに各町に基づき、その地域生活に則した内容へと変容してきたことが明らかになった。江戸時代の桑名では、城下の総鎮守春日神社の祭礼として、御車祭、比与利祭、そして今日の石取祭の原型である石取神事が行なわれていた。御車祭には2輦の楼車が、北市場と南市場に出されたが、これらは江戸時代以前より開催されていた市の名でもあった。江戸時代初頭には、市はそれぞれ本町と宮通付近で行なわれたものと比定でき、桑名の町の中心が春日神社門前にあったことが想定された。

譜代10万石の城下町となった桑名では、幕藩公認の東照宮祭礼とほぼ同内容の練物を行列し、城内入りして上覧を得るなど、政治的意味合いの濃厚な比与利祭が新たに開始された。しかし、この祭礼内容が興隆していた時期は短く、新たに宝暦5年(1755)より比与利祭から分離して開始された石取神事が、拡大と発展を遂げていった。石取神事で行なわれた内容は、鉦と太鼓の囃子であり、その調子や威勢の良さ、飾り物の創作およびその趣向の良さなどを町毎に競い合うものであった。比与利祭への参加が、桑名城惣堀内の町人地である内町地域に限定されていたのに対し、石取神事では新たに形成されてきた外町地域をも含み込んでいた。

以上から、桑名における祭礼が、春日神社門前部を中心とした御車祭から、城下町の内町に参加が限られ城内入りした比与利祭へ、そして、外町を含めた町単位で行なわれる石

取神事へと展開してきた流れを捉えることができる。桑名では、より多くの城下町住民が参加し得るかたちへと祭礼内容が遷っている。この動向の中で桑名における祭礼の独自性が発現した。比与利祭や分離前の「石取」などに見られた、城下町桑名における初期的な祭礼内容は、桑名の祭礼が独自性を発現していく過渡期の姿として位置づけられる。

江戸時代後期には、石取神事以外にも町毎に諸祭礼が行なわれており、当時の城下町桑名では町が実質的な結束力を持つようになったと考えられる。江戸時代中期における石取神事の比与利祭からの分化とその後の発展は、城下町桑名における実質的な町の成立、およびその発展を示していた。

最後に、下級藩士の日記（『桑名日記』）を通して、江戸時代後期の武家と石取神事などの町人祭礼との関わりについて考察した。下級武士は日常的に近隣の町人らと共に内職を行っていた。そうした親密な人間関係のもと、下級武家地区の祭礼には、町人の石取神事と同様に、作り物と囃子などが取り入れられ行なわれていた。江戸時代後期の城下町桑名における石取神事および諸祭礼の内容は、創作性に富み、地域生活に根ざしたものになっており、それらは武家、町人などの身分的な枠を越えて共有され、両者に支えられていた。

祭礼には、城下町住民らの地域生活のあり方や、彼らが結んでいた人間関係が如実に表現されていると考えられる。藩主の意向により開始され、その政治的意味合いが強調されがちな城下町祭礼であるが、本稿では、その祭礼内容は、江戸時代中期を境に城との結びつきを相対的に弱め、かわりに地域生活に根ざしたものへと趣を大きく転換していたことを指摘した。この動向は、城下町内部における各町の実質的な成立、およびその発展と密接に絡んでいた。そして、町毎に行なわれ、地域生活を基盤にした諸祭礼の興隆は、町人

町のみならず武家地区においてもみられ、この祭礼文化は江戸時代後期における城下町住民全体で支えられていたと言っても過言ではない。

本稿では、内職の実態などに触れるにとどまったが、未解明な部分の多い江戸時代の城下町住民の生業や暮らしの具体像を明らかにし、それらと祭礼との関わりを問うていくことは、今後に残された重要な課題である。また、武家と町人との相互関係については、本稿では論じることができなかつた上級武士を含めての検討、および事例の蓄積が必要である。江戸時代中後期の諸城下町における祭礼を、住民の地域生活から形成された文化の一表現として捉える視点を持ち、今後も再検討していきたい。（三重大学・非）

〔付記〕

史料調査に際して、桑名市博物館学芸員の杉本 竜氏に便宜を図っていただいた上、数々の貴重なご教示を賜りました。英文要旨の校閲では、三重大学人文学部の中川 正先生に大変お世話になりました。本稿の骨子は2004年6月の人文地理学会特別例会において発表いたしました。なお、査読者の的確な校閲によって、改めて論文の整理をすることができました。以上記して厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、卒業後も変わらぬ温かいご指導とご厚情を下さっている、筑波大学歴史・人類学系の石井英也先生と日本女子大学文学部の伊藤寿和先生に、心より御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) (1)黒田日出男・ロナルド・トビ「都市の祭礼文化—土浦と川越の祭り絵巻から」（朝日百科・日本の歴史別冊歴史をよみなおす17『行列と見世物』、朝日新聞社、1994）20～36頁。(2)黒田日出男「都市祭礼文化研究の現在」（川越市立博物館編『川越水川祭礼の展開』、川越市立博物館、1997）5～12頁。
- 2) (1)中野光浩「東照宮祭礼の歴史的特質につ

- いて」、地方史研究261, 1996, 67~89頁。
- (2) 牧田 勲「近世都市祭礼の成立と解体—樂園の幻影」、歴博84, 1997, 13~17頁。
- (3) 中野光浩「諸大名による東照宮勸請の歴史的考察」、歴史学研究760, 2002, 16~32頁。
- 3) 久留島浩「長崎くんち考」、国立歴史民俗博物館研究報告103, 2003, 80頁。
- 4) 渡辺康代「近世城下町における祭礼形態の変容—下野国那須郡烏山を事例として—」、地理学評論72A-7, 1999, 423~443頁。
- 5) 渡辺康代「宇都宮明神の『付祭り』にみる宇都宮町人町の変容」、歴史地理学44-2, 2002, 25~44頁。
- 6) (1) 飯塚 好「佐原祭礼の変遷と周辺の都市祭礼」、国立歴史民俗博物館研究報告124, 2005, 13~31頁。(2) 宇野功一「近世在郷町における祭礼の成立と展開」、国立歴史民俗博物館研究報告124, 2005, 59~97頁。(3) 宇野功一「近代都市祭礼における神輿巡行と山車巡行の分離過程」、国立歴史民俗博物館研究報告124, 2005, 101~130頁。
- 7) 前掲6), (2)。
- 8) 先駆的かつ代表的な研究として, (1) 矢守一彦「城下町プランの構造」、『都市プランの研究—変容系列と空間構成』, 大明堂, 1970, 247~346頁, (2) 同『城下町』, 学生社, 1972, がある。また, これらの研究史を整理したものとして, (3) 宮本雅明「城下町の空間類型」, 都市史研究会編『年報都市史研究2城下町の類型』, 山川出版社, 1994, 3~15頁, がある。
- 9) 岩淵令治「武家屋敷の神仏公開と都市社会」, 国立歴史民俗博物館研究報告103, 2003, 133~199頁。
- 10) 大岡敏昭「絵日記にみる中下級武士の生活」, 『日本の風土文化とすまい—すまいの近世と近代—』, 相模書房, 1999, 136~218頁。
- 11) 堀田吉雄校注『慶長自記』(原田伴彦編『日本都市生活史料集成7港町篇II』, 学習研究社, 1976), 588~599頁。
- 12) 榎本和真『『桑名』—歴史をたどる—』(山田安彦・山崎謹也編『歴史のふるい都市群・8—五畿内周辺の都市—』, 大明堂, 1995, 96~97頁)において、『慶長自記』を引用した指摘がみられる。
- 13) 久波奈古典籍刊行会編『久波奈名所図会』上・中・下巻, 久波奈古典籍刊行会, 1977。
- 14) 澤下春男・能親校訂『桑名日記(1~4)』, 澤下春男・能親, 1984。
- 15) (1) 小嶋秀夫『子育ての伝統を訪ねて』, 新曜社, 1989, 143~197頁。(2) 大口勇次郎・五味文彦編『日本史話2近世』, 山川出版社, 1993, 237~240頁。
- 16) 平成16年の石取祭には, 36ヶ町の参加があった。
- 17) 戦前までは, 本町・三崎通の四辻と, 宮通の木戸際でそれぞれ御車を組み立て, 社前へ曳いたという。
- 18) 通常36人で構成された桑名衆には, 居城を構える領主級の存在も含まれていた。桑名衆は春日神社における宮座の構成員でもあり, 氏人とも呼ばれ, 政治・経済のみならず, 神事的権限も持ち合わせた別格の存在であった。
- 19) 前掲11), 590頁。
- 20) 前掲13), 上巻, 57頁。
- 21) 前掲11), 593頁。
- 22) 『慶長自記』慶長6年(1601)条には「太田忠右衛門屋敷宮の前にて, 西10間うらへ10間通りて小屋をさし, 9月11日に移る。9月29日酒蔵たてる」とあり, 城下町割が断行されて間もなく, 太田氏は「宮の前」に間口10間, 奥行10間におよぶ屋敷地を得ていた。慶長年中, 「大市丸」という大船を保有した豪商, 下里氏も桑名衆の一員であった。『慶長自記』慶長13年(1608)条には「2月4日, 本町下里長兵衛より火出, 表家21焼, 忠右衛門うら, 源左衛門家蔵, 藤兵衛家馬や, 権兵衛家酒屋不残焼失」とあり, 本町付近には, 下里氏や太田氏をはじめ, 豪商の家屋敷が連なっていた様子がうかがえる。
- 23) 前掲13), 中巻, 45頁。
- 24) 四日市市立博物館編『祭礼・山車・風流—近世都市祭礼の文化史』, 四日市市立博物館, 1995, 64~73頁。

- 25) 桑名市教育委員会編『三重県祭礼行事記録調査報告書春日神社の石取祭』, 1998, 16頁。
- 26) 酒家, ひいては人々に幸福をもたらすとされる妖精を示す。能の題材の一つ。
- 27) 前掲25), 84頁。
- 28) 城下町弘前で行なわれていた弘前八幡宮祭礼においても, 同時期に類似した人形や山車が見えており, 各地の城下町で流行した祭礼形態であったことが推測される。渡辺康代「近世前・中期の弘前八幡宮祭礼にみる弘前町人町の特質」(浪川健治編『近世武士の生活と意識』, 岩田書院, 2004) 85~117頁。
- 29) 前掲25), 73頁。
- 30) 大福村と外町の福江町とが氏神(牛頭天王社)を共有していることから, 外町の各町は近隣農村から派生してきたことがうかがえよう。例えば, 外町の矢田町は矢田村から, 福江町は大福村と江場村から成立した町と考えられる。
- 31) 前掲13), 下巻, 140~142頁。
- 32) 比与利祭の城内入りに際しては, 練物の内
 験があった。
- 33) 前掲13), 中巻, 42~43頁。
- 34) 平太夫らは比与利祭を勤め先の米蔵(図2参照)で見物していた。ここからも, 城内に向けての披露を専らにした比与利祭の特徴がうかがえよう。
- 35) 前掲14), 天保14年(1843)10月7日, 14日, 28日条。
- 36) かつて, 祭礼の際によく引き起こされた喧嘩には, 個別の町に同組合の町人が必ずと言っていいほど加担していた。組合の境界には, 現在の石取祭の際にも提灯や注連縄が張られている。
- 37) 前掲13), 中巻, 42~43頁。
- 38) 工藤麟溪「石どりの記」, 不破義幹『石取まつり』, 桑名宗社社務所, 1972, 13頁。
- 39) 煙草刻の内職へは, 下級武士の若者が油町辺りへ通いで行なっていた様子も見られ(前掲14), 弘化2年(1845)4月26日条), 町人町においてもこうした内職が盛んに行なわれていたことが想定される。
- 40) 岩崎公弥『近世東海綿作地域の研究』, 大明堂, 1999, 166~178頁。

Transformation of Festivals in Kuwana Castle Town in the Edo Period:
Relationship between Festivals and Lifestyle of the Residents in Castle Town

WATANABE Yasuyo

The formation and succession of Ishidori Festival in Kuwana, a castle town in Mie Prefecture, is historically examined to identify the urban scenes and lifestyle of the people from the early Edo Period to the late Edo Period.

In Kuwana in the Edo Period, Kasuga Shrine conducted three festivals: Okuruma, Hiyori and Ishidori Festivals. Okuruma Festival, which was already conducted in the late Middle Age, represented the power of some families in Kuwana who made prosperity from water transportation. The names of floats in Okuruma Festival were Kitaichiba (Northern Market) and Minamiichiba (Southern Market). The names represented two markets, which took place on the streets north and south of the shrine before the Edo Period.

The participants of Hiyori Festival, which originated in the early Edo Period, were limited to the people in the inner part of the castle town in the Edo Period. In contrast, Ishidori Festival, which was birthed from Hiyori Festival in the middle Edo period, was supported by the townspeople of the entire castle town. Festivals in Kuwana expanded from the original northern and southern markets to the entire town. In other words, the festivals changed from those of the wealthy merchants to those of the entire townspeople.

The diary of a lower-class samurai in Kuwana castle town describes some aspects of the daily life in the late Edo Period. Lower-class Kuwana samurais were engaged in many kind of side jobs together with the townspeople. As a result of their usual interactions with the townspeople, they performed the same kind of festivals in the urban communities. Festivals in Kuwana during the latter half of Edo period were simple and hand-made ones, which were supported by both the samurais and the townspeople. Festivals need to be reexamined as cultures created through the daily life of the residents in castle towns.

Key words: transformation of festivals, Pre-modern castle town, urban community,
lifestyle of the residents in castle town, Kuwana